

もっと大粒でおいしく 環境にやさしい米づくり



米消費量の減少や生産過剰により米価が低下している中、産地間競争はますます激しさを増しており、生産調整を確実に実施し、消費者等にとってもらえる大粒で品質の良い米づくりを進め、産地のイメージアップを図ることが必要です。

消費者が求める米とは？

化学肥料や農薬の使用を減らした環境にやさしい米や栽培履歴のはっきりした米が求められています。

茨城県産米の現状は？

1等比率は高い水準であるが、千粒重は、主産県の中では低い。外食需要が増加する中、実需者からは大粒の米が求められています。

米づくりに5つのポイント+2つの取り組み

水田管理の ポイント

1 田植えは適期に行いましょう！ (コシヒカリは5月5日以降がベスト！)

2 早めの中干し！ (コシヒカリ等の中生品種は田植え後35日を目安に水を抜く)

3 出穂後の適正な水管理！ (出穂から落水期までは間断かんがい)

適期収穫・乾燥 調製のポイント

4 成熟期を見極めて適期収穫！
1.85mm以上の網目による適正調製！

土づくりの ポイント

5 たい肥等の施用と早めの稲わらすき込み！

適正な施肥管理

エコ農業茨城の実践
(化学合成農薬・化学肥料の低減)

米づくりに5つのポイント

1

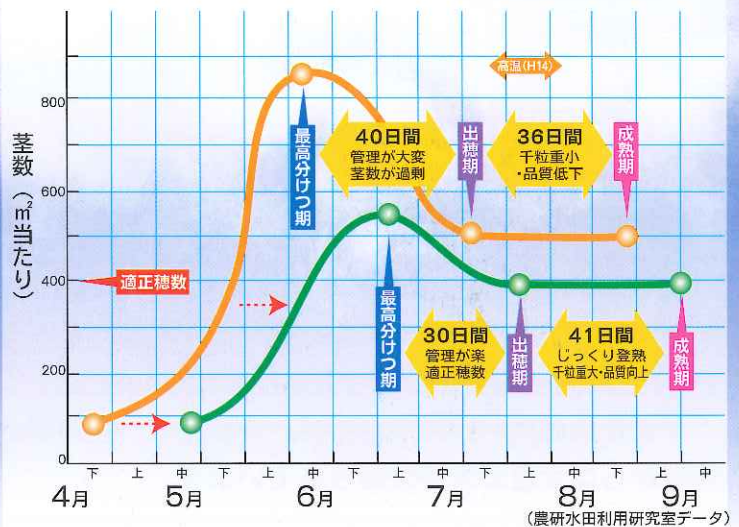
田植えは適期に行いましょう！（コシヒカリは5月5日以降がベスト！）

- 5月5日以降に田植えしたコシヒカリは8月に入ってから出穂，暑さのピークを過ぎてから登熟が進みます。

粒(千粒重)を大きく，乳白粒の発生を軽減し，整粒歩合を高めよう！



田植えを遅らせる効果



施肥・種まき・
田植え作業も
再確認！

- 基肥量は地力に合わせて控えめに設定(過剰な初期生育を防止)
- 健苗育成のため，1箱当たり播種量を乾籾で150g程度に
- 植え付け株数：坪当たり60株程度(株間18cm×畝間30cm)
- 1株当たり苗数：4～5本

2

早めの中干し！（コシヒカリ等の中生品種は田植え後35日を目安に水を抜く）

- 中干しは茎数を意識し，効果の高い時期に行い，茎数を適切に迎えることが重要です。コシヒカリ等の中生品種は田植え後35日頃，4月中下旬移植のあきたこまち等の早生品種は田植え後40日頃を目安に，茎数を観察・確認して中干しを実施しましょう。

中干しの程度

- 田面に軽くひびが入る程度。期間は10～15日。ただし，その間，極端に乾いた場合には走り水程度かん水する。

【中干しを始める時期】 1株当たりの茎数が18本程度

- 皆さんが思うよりも中干し開始時期は早く来ます。よくほ場を観察しましょう！

【中干し終了時】 稲の葉色が薄くなったとき(カラースケールで4程度(若竹色程度))が終了の目安

- 中干し終了後は，間断かん水を行います。

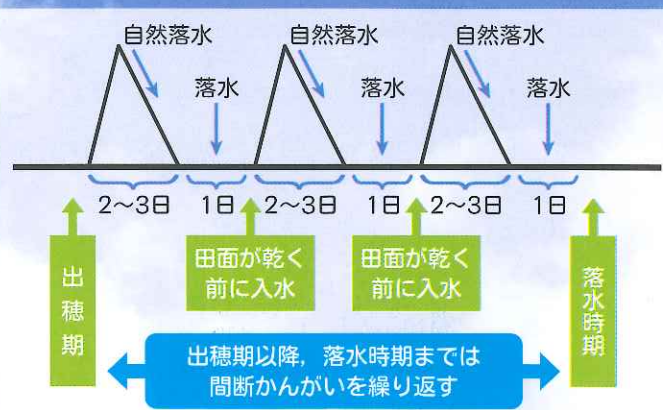
3

出穂後の適正な水管理！（出穂から落水期までは間断かんがい）

- 乳白粒発生抑制や根の活力を最後まで維持するため、落水時期までは2～3日程度の自然落水と田面が乾く前に入水を繰り返す間断かんがいを行いましょう！

※ 落水時期

- コシヒカリ等の中生品種は
出穂後30日程度
- あきたこまち等の早生品種は
出穂後25日程度



4

成熟期を見極めて適期収穫！ 1.85mm以上の網目による適正調製！

成熟程度を確認して収穫！

- 緑色を帯びた粳の割合（帯緑粳率）が10%になったときから5%になるまで（1穂当たり8～10粒程度）の時期が収穫適期です。
- 出穂後高温で経過した場合、登熟が進み、胴割れが発生しやすくなるので、成熟の程度をこまめに確認し、適期に収穫しましょう。

※ 収穫適期

- コシヒカリ等の中生品種は 出穂後約40～45日
- あきたこまち等の早生品種は 出穂後約30～35日

適正な乾燥、調製を！

【乾燥】 急激な乾燥を避けて胴割米の発生を軽減する「二段乾燥法」。

収穫後の高水分粳を
約18%まで乾燥

一時貯留

15%での
仕上げ乾燥

調製
出荷

【調製】 1.85mm以上の網目を使用し、適切な流量で調製しましょう。

5

たい肥等の施用と早めの稲わらすき込み！

- 土づくり効果の高い「牛ふんたい肥」を施用しましょう。（10a当たり乾田1トン、湿田0.5トン）
- 稲わら等の有機物は収穫直後の気温が高い時期に腐熟させましょう。
- 作土層15cm以上の確保を目標として耕起しましょう。
- 暗渠排水の施工等により透水性を維持・改善しましょう。

2つの取り組み

適正な施肥管理

- 土壌診断を行い、地力に応じた基肥適量施用！
- 草丈や葉色など生育に応じた穂肥の適期・適量施用！

穂がではじめる頃は、こまめに稲の姿を観察しましょう!!



コシヒカリにおける施肥のポイント

基肥

窒素成分量で3～4kg/10aが目安

穂肥

出穂前15日頃（幼穂長4cm程度）に窒素成分量1～2kg/10aが目安

※ただし、草丈が長かったり、葉色が濃かったりする場合は、施用時期を遅らせるか行わない。

注意!!

全量基肥肥料を使用する場合は、窒素成分量3～5kg/10aが目安です。なお、穂肥は行いません。（基肥+穂肥の施肥体系より10～20%程度低減できます）

※施肥量は、たい肥施用の有無や地力に応じて調節しましょう。また、側条施肥の場合は、窒素成分量が20%程度低減できます。

エコ農業茨城の実践（化学合成農薬・化学肥料の低減）

- 地区ぐるみでまとまって環境保全，環境にやさしい営農活動を展開し，茨城農業・農村・農産物のイメージアップを図るため，「エコ農業茨城」に取り組みましょう！
- まずは，環境にやさしい営農活動（減農薬・減化学肥料栽培）による米づくりを実践しましょう！

減農薬・減化学肥料栽培による米づくりに向けた 化学肥料の使用量（窒素成分量）及び化学合成農薬の使用成分回数の基準

化学肥料の使用量 (窒素成分量kg/10a)	化学合成農薬の 使用成分回数(回)
3.2	8

(注) 茨城県特別栽培農産物認証制度における使用基準(米)

※たい肥施用や有機質肥料の使用などで化学肥料（窒素成分量）の低減，種子の温湯消毒や成分数の少ない除草剤の使用などによる化学合成農薬の使用成分の回数低減が可能です。あわせて，病虫害を発生させないような健康な稲づくりや栽培管理がポイントです。



いばらき米をアピール!! 買ってもらえる米づくり!!

種子更新しよう!

指定種子生産ほ場で生産された種子を使用し，信頼される米づくりを行いましょう。